人と動物との共生社会
野良猫問題から考える

動物の愛護と管理を考える④

みなさんは野良猫を見かけたことはありますか?のんびり日なたぼっこをしていたりする姿はかわいらしいものです。しかし、一度立ち止まって考えてみていただきたいのです。病気になったら?餌はどうしているの?排泄は?すると野良猫を取り巻くさまざまな問題が見えてきます。

猫の繁殖力はとても強く、十分な餌があれば計算上1頭のメスから、3年後には2千頭以上に増えてしまいます。無責任に餌を与えてしまうと、目の前の子は一時的におなかが満たされるかもしれませんが、不幸な命が増えることにつながります。

また、増えてしまった野良猫は、余った餌による衛生問題や、車や物を傷つける、庭に糞尿をするといった地域への被害も引き起こします。餌を与える前に、その子やその子孫の命、その子たちが引き起こす被害に責任を持てるかしっかり考えましょう。

とある調査では、野外で死亡した猫の数は殺処分数よりはるかに多いとも言われています。交通事故だけでなく、病気や寒さなど、外は猫にとって過酷な環境なのです。

本当に助けたいと思っているのなら、大切な家族として迎え入れてあげてください。もし自分の家で飼うことが難しくても、地域の理解を得て地域で管理することで、野良猫による問題を解決していく「地域猫活動」という方法もあります。広島県では、餌やりやトイレのルールを定め、適切に管理を行っている地域に対して、無料で不妊去勢手術を行う制度を設けています。動物や地域への責任が果たせない場合は、餌を与えることを我慢するのも、立派な動物愛護です。優しさが自己満足になっていないか、よく考えてみましょう。

県では引き続き「人と動物との調和のとれた共生社会」の実現に向けて施策を展開していきます。県民の皆様のご協力をお願いします。

（広島県健康福祉局　食品生活衛生課）

ひろしま気候変動適応センター

⑤気候変動に伴う広島県の降雨の変化

短時間強雨に注意
雨の降り方が両極化する傾向に

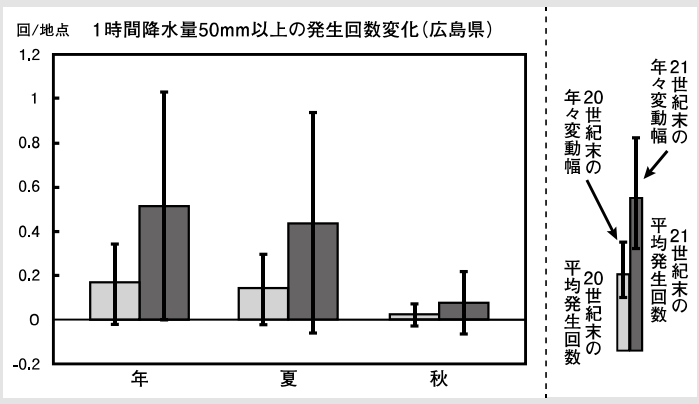
近年、「ゲリラ豪雨」や「これまで経験したことのないような集中豪雨」といった言葉をよく耳にするようになり、広島県でも平成30年7月豪雨の影響により甚大な災害となったことから、降る雨の量が増えているかのように感じていると思います。しかしながら、広島県各地の年降水量の変化を長期にわたって調べてみると、大きな増減は見られません。

年降水量は大きく変化していませんが、短時間に強い雨が降る日と、雨が降らない日の日数が共に増加していることがわかってきました。このことから、今後は、雨が降る日と降らない日の差が大きくなり、雨の降り方が両極化する傾向にあると見込まれています。

広島市の状況を詳しくみますと、1日の降水量30mm以上（激しい雨）、50mm以上（非常に激しい雨）の年間発生回数は増加傾向を示し、1879年～1888年までの10年間の平均発生回数は12.6回と4.4回でしたが、2011年～2020年までの最近の10年間の平均発生回数は17.5回と6.9回で共に増加しています。年間の無降水日は、225日～250日程度で推移しており、1879年～1888年の10年平均日数の239回から、2011年～2020年の10年平均日数の245回に増加しています。

最後に、降雨量の将来予測をご紹介します（**下図参照**）。広島地方気象台は、20世紀末から21世紀末にかけての広島県の気候変化について、「1地点あたりの1時間降水量50mm以上の年間発生回数は3倍以上になる」「1地点あたりの年間無降水日数は約10日増加する」と予測しています（引用：中国地方の気候変動 2017）。今後は、ますます短時間強雨に注意が必要です。

（ひろしま気候変動適応センター）



公衛協が取り組む 防災・減災⑤

住宅地に流れ込む汚泥
残すとカビや悪臭、衛生害虫発生の恐れ

土砂崩れや台風・集中豪雨などによる水害が発生すると、家屋・農地・工場・自動車・公共インフラなどに被害を及ぼします。この時、住宅地に流れ込む汚泥（土砂や汚水）は、単に水と土砂だけでなく、さまざまな菌や薬品、油、下水などを含む可能性があります。

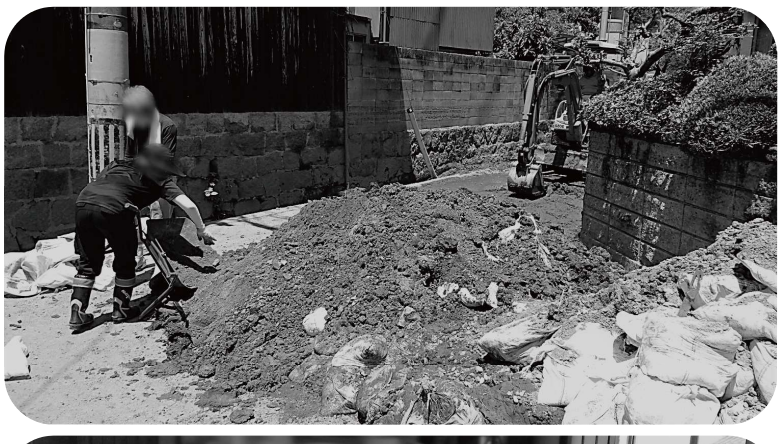
このため、汚泥を放置してしまうと、カビや悪臭、衛生害虫の発生などにつながるだけでなく、泥が乾燥すると細かなホコリとなって飛散し、呼吸器や粘膜に炎症を引き起こします。健康被害やご近所トラブルにつながるので、公衆衛生の維持のためにも、速やかな除去が必要とされています。

公衛協は、発足以降、「蚊とハエのいない郷土建設運動」や「地域ぐるみ大掃除復活運動」「散乱ごみ追放キャンペーン」など、地域ぐるみで衛生害虫の駆除運動や美化運動を展開し、住みよい環境づくりを支えてきました。一方で、平成30年7月豪雨の際、家屋や庭、道路の土砂の撤去や清掃など、地域の公衆衛生の維持に力を発揮できなかったという反省もあります。

平時のうちから、我がまちは、どこに汚泥を集積するのか、どうやって床から泥を出すのか、ボランティアはどうすれば呼べるのか、どんな道具が必要なのか、土嚢袋はあるか、空き家はどうするか、独居の高齢者やハンディキャップのある方の家の復旧作業は大丈夫かなど、考えておく必要があります。

土砂かきの肉体労働は大変です。ボランティアに来てくださる支援者がスムーズに活動できるよう、地域の調整役として公衛協が役割を担える場面がないか、一緒に考えてみましょう。

（地域活動支援センター）



土砂かきをする被災者とボランティア（上）、床下に溜まった汚泥をかき出すボランティア（下）